
自殺

三一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺

【ZPDF】

Z3545T

【作者名】

三一

【あらすじ】

春と初夏の混じり合つ季節。放課後の屋上に何気なく集まつた駿と茜。彼らは、平凡にすぎていく毎日を生きていることを確認するため、東校舎の屋上から「自殺」をする。

土の匂いがする。春風に巻き上げられた、乾いた匂いだ。学校の屋上のフェンスに両肘と顎を載せながらぼんやりとグラウンドを見下ろしていた。夕暮れと、サッカー部が声をあげてボールを追いかけているのが見える。今日は水曜日。明日は確か女子ソフト部が使うはずだった気がする。

俺は帰宅部だから関係ないけど、毎日見ているから覚えてしまった。スポーツやって汗かいて頑張っているやつを見下してるわけでもない。友達にもたくさんそういうやつはいるし。要はみんなやりたいことを自由にやって、満足していればそれでいい。俺も今ここでぼんやりしているのを無気力に感じてはいらない。満足している、それなりに。

「サッカー、したいの？」

後ろから細くて高い声がした。誰だかは知っていたので、振り向かないまま俺は笑った。

「体育と団体でやつてるから部活はいいや。お前こそ、部活終わったのか？」

彼女は、何も答えない。あまりにも沈黙が長いので、さすがに振り返った。

すると、広い屋上の真ん中で胡坐をかいてＰＳＰに夢中になつている彼女がいた。呆れて俺はフェンスから離れ、よれよれになつた鞄を持って彼女の隣に座つた。

こいつは黒髪ロングやら茶髪やらで化粧もバツシバシな女子とは正反対だ。黒髪のベリーショート、すっぴんでも端正な顔立ちで、

飾らない。

「スカートで胡坐かくなよ」

「…あー、中に短パン履いてるから大丈夫」

性格はこんな感じ。男寄りの考え方なので、女子から人気もある。一部の女子…まあ、正反対な奴らにはそうとはいえないが。

俺は「そうかよ」と短く答えてその場に寝転がった。

空はオレンジと青が混ざりかけた色。絵具を混ぜてもあんな色にならないのに、どうして空だと綺麗なんだろう。いつも思う。その上に飛行機雲が一本不規則に重なっている。小さい頃は、空の飛行機を見つけては友達とよくわからない願い事をして遊んでいた。叶つた試しなんてないのに、何回も、何回も。

「なあ」

「ん」

「子供の時も、飛んでる飛行機に向かって願い事しなかった?」

少し間をおいて、彼女はPSPのスタートボタンを押してこっちを見た。

「したかもしない。たぶん」

そう言つとまたスタートボタンを押して、田線を小さな画面に戻した。

俺はそんな彼女にいつもどおり「だよなあ」とだけ返した。ゲームに夢中になつている時はいつもこうだからだ。半分聞いているが、

半分は聞いていない。

俺たちはいつも、放課後5時半にここに来る。約束したわけでもないし、そう決まってるわけでもない。屋上には俺たちだけ。なぜなら、ここへの出入り口は理科準備室の窓からしか入れないからだ。この学校の屋上は今俺たちがいる東校舎と、西校舎がある。この東校舎と繋がっているが、西校舎の屋上の方が1m低いという変な作りだ。西校舎の屋上は音楽準備室の窓に繋がっている。

俺は科学部という名の帰宅部で、理科準備室の鍵当番。一方、こいつは音楽の小林先生と仲がいいので、音楽準備室の窓をいつも開けてもらっている。そうやって、俺たちはここに自由に入ってくる。

「駿、数学の小テストした?」

彼女はゲームを止めて鞄からノートを出してきた。俺は何も言わずに今日やった小テストを渡した。

「ありがと。うわ、満点かよ

「帰宅部することねえもん」

「帰りに遊びに行つたりしないの」

「たまに」

「はあ」と力のない返事をしながら彼女はノートにそれを写した。その間、俺はケータイで友達にメールを返していた。今度の日曜にサッカー部は試合があるらしく、応援に行くことにしている。やつも校庭で声を出していたやつだ。

「はい、どうも」

「おひ。 そんなんやるか?」

「そーねー」

彼女は立ちあがつてスカートをはたいた。
ああ、確かに短パン履いている。わかっていてもちょっと残念に
思うのは男の悲しき性だ。背は普通より少し高くて、細い脚。ブレ
ザーがよく似合つ。野球部のマネージャーっぽくないと想つのは俺
だけだろうか。

軽い足取りで鞄を持ちながら彼女は東校舎と西校舎の境田に立つ
た。風が彼女の短い髪を細かくなざる。後ろからみるとなんとなく
凛々しい。俺も隣に並んで下を見下ろした。

いつも思う。ここに立つとまるで屋上から飛び降りるような、緊
張とちよつとした恐怖が入り混じる。そしてどこからともなく感じ
る、高揚感。俺たちは制服と鞄と靴を身につけて、この屋上から身
を投じる。

「今日はどうな一日だった?」片岡駿

「楽しかったことは休み時間と体育。あと理科のさかもつちゃん
の雑談。不快だったのはA組の森岡たちに絡まれたこと」

「絡まれてびついたんですか?」

「アキミチがすぐに助けに来てくれましたー」

アキミチは友達で柔道部のエース。身長は190オーバーの頼れる
やつだ。

「情けねー」

「うるせー。今日はどんな一日だったんですか？枝野茜」

「楽しかったことはエリカとサキと話した」と、部活が早く終わることと、コカリに彼氏ができたこと。不快だったのは購入のパンが売り切れたことと、さつきB組の名波と小田が教室でチューしてゐるのを見てしまったこと。」

「名波と小田へ付けてんのあいつら？」

「わあ。やうこわいとやしょ。あのまま先生に見つかってしまえば面白いくらい」

一人で笑いながら暗くなつていく空と雲を見ていた。今日も終わる。一日が終わつていぐ。ただの、平凡な学生の一日が。

終わることは、死ぬことに似てゐる。始まることは、生まれることに似てゐる。生きることは連續的な出来事。一日も同じなんだ。朝に生まれて、昼を生きて、夜で死ぬ。そしてまた明日を生きられる。

それを確認するために俺たちはここに立つてゐる。繰り返されて麻痺しそうになる毎日を整理するために。生きてゐることを再確認するために。一日をただの一瞬にしたくないから。

「総合して、今日も私の世界は平和でしたと」

「俺の一曰は少しひやつとした以外は平和だった」

「一人で合図する」ともなく、東校舎の屋上から飛び降りた。

自殺をするんだ。自殺の真似事をしながら、俺たちは生きたいと

思つてこる。宙に浮かぶ瞬間は達成感と後悔を背負いながら、重力に抱き寄せられる。何気ない日常を、平凡に、幸せに生きていることを、西校舎に下り立つ瞬間に噛みしめる。足にジンとくる感覚は、俺たちが生きている証だ。

「明日もいこ一日になりますよつこ」

西は手で空に三角形を作りながら呟いた。

「何してんの」

「わいつてたでしょー。久々にやつてみたの」

見上げると、チカチカと光を点滅させながら飛行機が群青に染まる空を泳いでいた。

「でも願い事叶つたことある?」

「うーん…忘れた!…いうか夢のない」と言わないでよ

こんなのは根拠のない子供の遊びで、歳を重ねるうちに二つの間にかやらなくなってしまったもの。なつかしみはするけど、今さらやるのは気が引ける。

「まあ、験担ぎみたいなもんじやない?」

「…そうだなあ

俺は三角形を作つて飛行機が見えなくなる前に空に掲げた。

「今日気持ちは寝て、明日起きなければなりませんが」

「なにそれ

「験担

呆れた顔で彼女は音楽準備室の窓を開けに行ってしまった。暗くなる時間が気温の上昇とともに遅くなつてこく。明日は暑くなるらしい。家に帰つたら、こつものテレビ番組と母親の夕食が待つていてる。

「満足

駿は小さく呟く。そして茜の後をゆっくり追いかけながら、笑つていた。

おしまい

(後書き)

初投稿です。読んでくださった方、ありがとうございました。評価等いただければ光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545t/>

自殺

2011年10月9日02時45分発行